

中央教育審議会初等中等教育分科会（第 152 回）意見

令和7年10月20日（月）

岩本 悠

議題（1）初等中等教育における教育課程の基準等の在り方に関する審議状況について

1. 自らの人生を舵取りする力の育成に向けて

「自らの人生を舵取りする力」という言葉は、今まであまり使われてこなかった表現だと思いますが、今これからの時代や子供の実態を考えれば、非常に重要な力であると考えます。今後、この力を「みんなで」育成していくためには、「自らの人生を舵取りすることができる」とは具体的に何ができるということなのか、各段階における分かりやすい目標や子供の姿に落とし込んでいく必要があるかと思えます。

その際、義務教育の最後には、多様な進路の選択肢（例えば、進学か就職か、進学においても高専や高校、高校でも全日・定時・通信、そのなかでも多様な学科・コースなど多くの選択肢）が目の前に広がるなかで、自らの人生の進路を舵取りする必要があるため、例えば義務教育修了段階の目標としては、「一人一人が自分の好き（興味・関心）得意をベースにしながら、必要な情報を収集・分析し、自分の意見を形成し多様な他者との対話と合意を図り、主体的に自分の進路を自分で決めることができる力」の育成といったような目標を明確化し、子供・保護者・教員など「みんなで」共有しながら、学校・家庭・地域の教育活動全体を通したキャリア教育などにより「みんなで」育てていくという方向性を明示化していくべきではないかと思えます。

2. 民主的な社会の創り手の育成に向けて

民主的で持続可能な社会の創り手の育成に向けて、子供のより主体的な社会参画に関わる教育の充実・改善、とりわけその中心となる特別活動の更なる充実・改善（特別活動の意義・重要性の再確認、位置づけの再設定・明確化、必要に応じた名称の変更等も含む）の検討は重要だと考えます。一方で、教員の負担への配慮もしながら、特別活動及び社会参画に関わる教育を教員や学校のみで充実させていくには限界があり、今後は学校内で完結する教育活動にとどまらず、地域・社会に開き、地域・社会との連携・協働や役割分担を進めていく必要があるかと思えます。具体的には、PTA や卒業生会、学校運営協議会、公民館、社会教育団体等の活用や連携・協働体制の構築、コーディネート人材の配置・活用、学校行事等の地域連携・地域展開（一部、地域移行も含む）などを検討していく必要があるのではないかと思います。

3. 多様性の包摂及び多様な他者との協働に向けて

排他や社会分断を助長するのではなく、多様性を包摂し、多様な他者と協働していける民

主的な社会の創り手の育成には、子供たちが異文化や異なる他者との交流を通して多様な価値観や見方を獲得していくことが重要です。とりわけ身体性や実体験を伴う留学や修学旅行といった異なる地域・環境・文化へ入り活動・体験する越境学習はその貴重な機会となります。今後は、こうした機会を「旅行・集団宿泊的行事」といった集団宿泊・集団生活にばかり焦点化されたような表現に留めず、越境学習の機会としての現代的意義の再設定及び意義・位置づけの明確化を行うとともに、内容も小中学校段階では、児童生徒が平素と異なる環境に赴く越境学習においては、例えば地方の児童・生徒は都市部などで地域の魅力等の発信・商品販売・観光PR等、都市部の児童・生徒は地方での農業体験や農山漁村交流・地域協力活動等、他地域での調査探究・協働活動等がより想起・促進される記述の充実を図り、必要に応じて名称も「越境・協働探究的行事」などへの変更も検討しても良いのではないのでしょうか。

また、修学旅行はこうした越境・探究的な学びの貴重な機会であるにも関わらず、近年の交通費・宿泊費・燃料費等の高騰により、参加辞退をする家庭が増加しています。家庭の経済状況による越境学習の機会格差を是正すると同時に、地方観光・地域間交流の促進にもつなげるために、今後は、修学旅行に関する就学支援の拡充、子ども農山漁村交流プロジェクトの地財措置の拡充・充実や普通交付税措置化等による家庭の負担減の方策なども別途検討していけると良いのではないかと思います。

4. 高等学校入学者選抜の在り方

義務教育と高校教育を接続する高等学校入学者選抜においては、学力検査のみによらず、義務教育修了段階までに育まれてきた子供たち一人一人の好き（興味・関心）得意や質の高い探究的な学び、主体的な社会参画に関わる教育等で身につけた資質・能力を、多面的・多角的に評価できる多様な選抜方法の拡充が重要であります。今後、現場の負担に配慮しながら、どのように高校入学者選抜の改革をさらに進めていくべきなのか、都道府県教育委員会等との協議をはじめていく必要があると考えます。

5. カリキュラム・マネジメントの在り方

カリキュラム・マネジメントについては「カリマネ＝教科等横断の視点での教育課程編成と理解され、単元配列表の作成が目的化している」等の課題点が指摘されています。今回の論点整理で掲げられている「質の高い探究的な学び」や「質の高い深い学び」の実現には、シラバスや単元配列表の作成などの明示的なカリキュラムに留まらず、学級・学校の風土・学び土壌の影響、さらにはその風土の形成に大きな影響を及ぼしている教員の指導観・指導姿勢等といった潜在的なカリキュラムの影響が大きいと指摘されています。今後、質の高い深い学びを実現するカリキュラム・マネジメントを求めるのであれば、目に見える計画や表の作成のみに留まらず、学級・学校風土・学びの土壌や教員の指導観・指導姿勢等といった、いわゆるヒデューン・カリキュラムも含めたカリキュラム・マネジメントという一段深い捉え方に、カリキュラム・マネジメントの定義や内容を深化させていく必要があるかと思います。

6. 学びに向かう力、人間性等の今後の整理イメージ

学びに向かう力、人間性等の今後の整理イメージ（スライド番号 18）において、「学びの主体的な調整」はピンク色の輪で表現されているが、「自分の思考や行動を客観的に把握し認識（メタ認知）しながら学習を自己調整し、思考や行動を修正したり次の思考や行動に繋がったりする力」としての、こうした自己の客観的な把握や認識（メタ認知）による自己の調整は、他者との関わりや対話、他者からのフィードバックなどとの往還によりなされていくものであることを考えると、左側の「初発の思考や行動を起こす力・好奇心」のピンク色の輪と右側の「他者との対話や協働」の青色の輪の両方の往還によって成り立つものであるため、上にある「学びを方向付ける人間性」と同様にピンクと青色の両面のある輪の色にするのがイメージとしてはより適切なのではないのでしょうか。